

第5章 まとめ

今回の年報で取り上げた、2006年度の調査は、今までの徳島大学構内調査歴の中でも、特筆すべき成果であったといえる。

医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修地地区では、弥生前期中葉の小区画水田を検出した。この結果、徳島大学蔵本地区構内北半一帯に、弥生時代前期の水田跡が展開していることが明らかになった。さらに、従来の調査成果を加えると、ほぼ弥生前期の集落景観を復原することが可能となった。

すなわち、南側の眉山に近い尾根筋の微高地上に居住域や墓域が展開し、北側の低地との境界付近に旧河道と用水路網とが展開する。その北東側に水田域が展開していることが明らかとなった。

これらの集落は、弥生前期中葉～前期末・中期初頭にかけて頻発した洪水起源のシルト層によって埋積し、その後は中世後半ごろまで安定化したとみられる。一方で、弥生前期の可耕地や用水路網は、これ以降機能することはなく放棄されたものと考えられる。

西病棟建設地区では、第2遺構面において、7基からなる方形周溝墓群を検出した。これらはすべて4隅の切れる、伊勢湾沿岸地域に特徴的な墓制である。これらは、西南方数キロに位置する名東遺跡から断続的に展開し、今までに計40基近くが確認されている。少なくともこの地域に源流は追えないものであるから、今後は、その導入の経緯がどのようなものであったのかを追求していかなばならない。

第3遺構面では、なんといっても畠遺構の検出が最大の成果であろう。弥生前期では全国で3例目であるが、前2例は、いずれも耕作土を掘削した後に、畝間の溝を検出したものであった。しかし、今回の類例は、これが洪水砂に保護されていたために、畝の頂部から検出することができたのである。弥生時代は列島で水田稲作が本格化した時代であるから、水田遺構には十分に注意が払われるけれども、畠遺構については、意識した調査がおこなわれてこなかった経緯がある。確かに畠遺構の検出は、技術的には困難ではあるが、今回のように洪水砂に保護されたような場合は、十分に検出可能であると考えられる。微高地から低地へと向かう集落縁辺の緩傾斜地などでは、今後十分に注意を払った調査が必要となつてこよう。その畠の機能であるが、まだ花粉分析、プラント・オパール分析が途上のため、現時点では保留としておきたい。

今回のもうひとつの成果は、イネ・雑穀類といった炭化種実を回収できたことである。今回、炭化物・焼土が顕著にみられる遺構をいくつか選択し、埋土を取り上げ、0.5mmメッシュの篩を用いて水洗した。なかでも、畠の水口部分にみられた小規模な土坑からは、イネのほか雑穀類の炭化種実が多数出土した。

今までの調査でも、炭化米は回収できていたが、今回フローテーション法の導入によって、雑穀類も相当存在していたことが明らかとなった。この地域では、弥生時代前期を境に用水路網と水田遺構が廃絶されていることが判明しており、以後畠作へと傾斜していくことは、文献資料や旧国名である「阿波」をみても間違いない。今後とも雑穀種子回収をすすめ、イネのみならず、雑穀利用の展開を明らかにしていきたい。なお、出土種実の一部は国立歴史民俗博物館に鑑定・年代測定の依頼をおこなっている。成果が出次第、随時報告していく予定である。